

東海道の名所『桜井戸』

県立大学食品栄養学部棟の西北に、北へ下る道がある。瀬名竜爪線なのだが、これをずっと下りていき、JRの高架をくぐる手前左に、『桜井戸』がある。

かつては『桜井戸の灸』として有名で、駿河の人が他所へ行き、背中の灸をみせると、『静岡から来た』とすぐわかったというほど有名な処だったという。そのいわれは、ある日、行き倒れた旅人を助けたところ、お礼に灸を教えたというもので、これが大変な評判となり、『桜井戸の灸』はいまなお、人々の言葉に出るほどである。

『山岡鐵舟の看板も』

またここには、幕末の山岡鐵舟の書いた素晴らしい看板も残されている。静岡鉄道（静岡のお茶を清水港に運ぶ軽便鉄道が始まり）も、わざわざ『桜井戸』という駅を設けたほどだった。

谷田風土記

しかし、区画整理があり、移転を余儀なくされたことや、灸を伝える人が絶えたため、いまでは『遺跡』のみとなっている。

それでも『井戸』であるため、防火水用貯水槽が地下に設置されており、一帯は『史跡桜井戸』として大切に保存されている。一帯に毎年地名にちなんだ見事な桜が咲くのも嬉しいことである。

(国際関係学部教授・高木 桂蔵)



東海道の名所『桜井戸』

78

米国アリゾナ大学と学術交流協定を締結

本学では、米国のアリゾナ大学（The University of Arizona）と、学術交流協定の締結に向けて協議を進めてきたが、このたび協議が整い、廣部雅昭学長が5月1日（木）協定書に調印した。海外の大学等との交流協定の締結はアリゾナ大学が7校目。

今後の具体的な交流事業については、当面は薬学部の教員交流が主な交流となるが、将来的には薬学部以外の学部の教員交流や学生の相互交流などについても推進を図っていく予定である。

アリゾナ大学（The University of Arizona）

所在地： 米国 アリゾナ州ツーソン市

設立年： 1885年創立

学 長： Peter W. Likins (ピーター・リキンス)

学 部： 16学部(College)と8専門学部(School)

学生数： 36,847人（うち大学院生：7,420人）

教員・研究者数： 4,759人



学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎！

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル、その他寄稿を積極的にお寄せ下さい。大歓迎します。

事務局経営課・企画スタッフ（管理棟2階）法月あてにお願いします。

E mail: k i j o 4 @ g m . u - s h i z u o k a - k e n . a c . j p

企画・編集 静岡県立大学広報委員会 TEL 054-264-5103

静岡県立大学ホームページアドレス: <http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp>



HABATAKI  
はばたき  
UNIVERSITY OF SHIZUOKA  
52-1 Yada, Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan  
inside NEWS



CONTENTS

入学式式辞.....	1	『漢方と薬草の会』開催案内.....	20
誓いの言葉.....	5	教員の人事.....	20
大学院入学式式辞.....	6	はばたき寄金からのお知らせ.....	21
ファーマカレッジ2003参加者募集.....	9	恩師との出合いを顧みて.....	22
卒業式式辞.....	10	受賞.....	23
SARSの対応.....	14	研究助成の採択.....	23
副学長に大野忠氏を招聘.....	15	研究室・ゼミ紹介.....	24
日本医療薬学会論文賞を受賞.....	15	フィリピン大学留学体験記.....	25
意欲、集中力、継続力.....	16	健康をつくる食事のワンポイントアドバイス.....	26
JAPANESE BOOK.....	17	谷田風土記78.....	27
科学研究費採択状況.....	17	アリゾナ大学と交流協定締結.....	27
開学記念行事を開催.....	19		

# 平成15年度静岡県立大学入学式式辞

静岡県立大学長 廣部 雅昭

平成15年4月10日、本学大講堂で静岡県立大学入学式が行われた。石川県知事、森県議会議長をはじめ、多数のご来賓出席のもと、5学部586名の新入生を前に廣部学長が式辞を述べた。

また入学生を代表して、経営情報学部の諏訪幸子さんが誓いのことばを述べた。

本日ここに、石川静岡県知事、森静岡県議会議長をはじめ、ご来賓の方々、また多数の保護者の方々のご臨席を頂き、盛大に平成15年度静岡県立大学入学式を挙行出来ますことは、真に喜ばしい事であり、関係者一同深く感謝を申し上げる次第です。

まず始めに、これまでの努力が報われ、この度本学への入学を果たされた、5学部586名の皆さんに対し、大学を代表し、心からのお祝いと歓迎の意を表したいと思います。またこれまで長い間、ご子弟を慈しみ、励まし、支えてこられ、今共に喜びを分かち合っておられるご家族の皆様方に対しましても、心からの敬意とお祝いを申し上げますと存じます。

皆さんが、将来進むべき道を熟慮し、自身の意思で選択した本学の特徴について、まず述べたいと思います。皆さんも既にご承知のように、日本の大学は現在大きな転換期にあります。来年度から全ての国立大学が独立法人化され、自立的な経営、個性的な研究、教育を実施すべき方向性が打ち出されました。このことは競争原理を導入することによって、国公立を問わず、すべての大学



が、いわゆる護送船団依存的体質から脱皮し、生き残りをかけて自助努力を果たすことを促す国家的施策の一環であると言えます。少子化に向かう中での長引く経済不況などが拍車をかけていることもありますが、国際競争力を高める必要に迫られているわが国にとって、大学の質的変革と、大学人の意識改革が極めて重要になっていることを示しております。

公立大学も数年以内に、大きな変革の波がやってくることは必至であります。現在は、各自治体の中にある複数の公立大学の統合などが先ず行われようとしております。その点、静岡県は既に16年前に、新しい21世紀社会の動向を予見したように、それぞれ独立して存在していた県立三大学を統合し、さらに全国初の特徴的な学部、大学院等を新設して今日の静岡県立大学を創設したもので、県内唯一の公立大学となっております。現在薬学部、食品栄養科学部、国際関係学部、経営情報学部、看護学部、およびそれぞれの大学院研究科、環境科学研究所、医療・福祉系に特化した短期大学部と、その部局構成、設置理念ともに時

代を先取りした先見性のある総合大学として、社会から一定の高い評価を頂いて来たと考えております。

しかし社会の急速な変化は、意識の変化の速度をはるかに超えて、われわれに様々な変革を求めてきております。私どもは大学としてあるべき普遍的な姿と、同時に社会の要請に応えうる県立大学としての強烈な個性をいかに構築し、その存在意義を社会にアピールして行くかを常に意識しつつ改革を進めておりますが、重要な点は、自らを謙虚に省みることが当然として、時に評価の座標軸を大学の外に置いて見ることであります。

本学の各部局の設置目的・理念は、時代の大きな変化の流れの中にあっても、今なお色褪せたものではなく、むしろそれらの明確な具現化と教育・研究の成果を、社会に分かりやすく還元するための一層の努力が求められているものと考えております。

一方で更なる個性化を目指すためには、社会が今大学に何を求めているのかという観点に立って、本学の持てる知的資産を戦略的に融合する視点が重要であると思います。言い換えれば、専門分野の異なる部局がただ混在する「混合型総合大学」から、社会のニーズに応えるために、部局の壁を越えて、大学のシーズを融合する「融合型総合大学」を目指すことであります。本学の各部局はいずれも社会と密接な接点があり、かつ学際的な色彩の強い専門性を有し、社会貢献のみならず、研究・教育の分野においても、有益かつユニークな新領域を創成し得る基盤が存在すると確信するからであります。

本学はこのような視点から、教育の面で部局間単位互換制度を積極的に導入する一方、3年前から各部局の教員の研究成果を学内外に公開の形で、

教員自身が発表する制度を設けました。静岡県立大学学術フォーラム（USフォーラム）と称しますが、このことにより異なる専門分野間の相互理解を深め、研究・教育面での連携意識を醸成するとともに、学外との産学連携、研究連携などの手がかりを与えることになればと期待しているところであります。また大学運営の面でも、より開かれた大学として、社会との双方向的な関わりを強化し、社会との連携を円滑に進めることを目指しております。



昨年度文部科学省は、日本の大学が世界トップレベルの大学と伍して競争するために、教育・研究のレベルアップを図ることを目的として、国公立大学全ての中から、個性的で優れた研究計画を有する大学を重点的に支援する「21世紀COEプログラム」を発表いたしました。本学からは大学院薬学研究科と生活健康科学研究科の研究を「健康長寿・薬食同源」をキーワードに融合した拠点形成計画を申請し、学際・複合・新領域部門での22大学の一つに採択されました。これは規模の小さな公立大学でも、地域特性などに根ざした特徴的なオンリー1の研究・教育を、異分野融合による連携協力によって世界レベルにまで高め得る可能性を示した点で画期的なことと評価されております。今後はその評価に応え得る実績を示すこ

とにありますが、レベルアップのためには常にハードルを高く設定することが重要であり、そのような積み重ね一つ一つが大学の活性化に繋がる道であると確信しております。

戦後約半世紀わが国には民主主義と平等主義が浸透し、それが国民の平均的教育水準を高め、個人としても勤勉な社会の歯車となって、戦後の驚異的な繁栄を支えてきた、これは紛れもない評価すべき点ではありますが、それが逆に画一的で個性の乏しい人材を育成する結果となり、熾烈な国際競争時代に、たくましく勝ち抜いて行く力強さが、国全体としても、個人としても失われ、今日のような混迷した社会を生み出す遠因にもなっていると指摘する識者は多く、現在国が行っている教育改革、大学改革も、その軌道修正の一環であると考えることが出来ます。

私が新入生の皆さんに申し上げたいことは、在学中ただ漫然ときめられたカリキュラムに従って、そこそこの成績をあげ、卒業すれば、適当な就職先が待っていると考えているのであれば、大変な間違いであり、一昔前ならばともかく、今の社会はそのような人物を求めてはいないと言うことです。皆さんは明確な目的意識を持って、それぞれの学部を選択したものと思いますが、仮にそれほど明確なものを持たずに入学したとしても、在学中に、自分は将来何をやりたいのか、何が出来、どのように社会に役立つとしているのか、自分がアピール出来る、人と異なる能力や個性は何か、などを常に考え、目標を定め、可能性の実現に向けて、自らの意思で能力を練磨する積極的な努力を怠らないことでもあります。その自覚と意識があれば、大学がそれを助長する多くのものを、ハード、ソフト両面で提供しておりますし、教員もあ

らゆる点で助力を惜しまないでしょう。また社会はそのような個性的能力を有する積極的な人材を渴望しています。「努力するものが報われ、墮するものは淘汰される」この当然とも言える厳しさが、大学のみならず、今社会のあらゆる組織、また個人に対しても、突きつけられていると考えるべきであります。「護送船団」「エスカレーター方式」「学歴社会」「寄らば大樹の蔭」などといわれた価値観が今や根底から崩れようとしているのであります。

さて皆さんはこれからそれぞれの専門学部で教育を受ける訳ですが、その導入教育としていわゆる教養教育が行われます。本学も「全学共通科目」として、全学部の教員が協力して行うもので、自身の目指す専門領域以外の分野の知識や考え方を学ぶことで、視野を広め、教養を高めることを目的としておりますが、平成3年以降全国的に大学のいわゆる「教養科」が改組されて以来、現実はその理想とはほど遠い方向に進み、現在全ての大学が再度教養教育の見直しを図っております。本学も約2年をかけて再検討を進め、本年度入学の皆さんから新しいカリキュラムのもとで実施することといたしました。そのポイントは、全ての学部教育を効果あらしめるため、全学的観点より共通補完の工夫を凝らす。高度の専門職業人が備えるべきヒューマンウエアを修得させる。現実感覚を研ぎ澄ます方向で、専門分野のトピックスを易しく解説する。というもので、具体的には、語学教育の充実、コミュニケーション、表現法、思考法、情報処理技術などからなる第一部門と歴史学、法学、政治学、哲学、数学、物理学、化学など人文・社会・自然科学などの体系的学問の概論ならびに専門導入教育を行う第二部門が中心で、新しい時代への適応と、過去の反省点を踏まえた

内容となっており、単なるカルチャーセンターの教養教育とは異質のものを目指しております。

もとより教育というものは、魅力あるメニューに加え、教師と学生双方の熱意と努力がなければ成果が上がるものではありません。安易な点取り主義に走るようであれば、理想の実現は困難であります。社会が求める教養を身につけ、個性を磨くために、学ぶのは他ならぬ皆さん自身であることを忘れないで頂きたいと思います。本学は様々な専門分野を含む総合大学であり、意欲さえあれば、広く学ぶことが出来る環境にあります。先に述べたように、大学としても融合型総合大学を目指し、新しい個性を生み出すべく構想を練っておりますが、学生の皆さんも大学を活用し、複数の専門分野に通ずる位の気概が欲しいと思います。そのために要望があれば、他学部の講義などを自由に聴講できる制度を設けても良いと考えております。今社会から最も求められている創造的能力は異質のものを融合する努力の過程から生まれることが多いと考えるからです。

一方で本学は平成9年以降、「静岡県立大学はばたき寄金」を創設し、世界にはばたく人づくり事業や、国際交流事業、本学の学術・文化等の発展向上に努めた者の顕彰を行っております。学生の表彰事例としては、これまで国際ボランティア活動での第1回秋野豊賞受賞者、国際交流協定を締結している外国諸大学との交換留学生双方に対する奨励金の授与、国体ボーリング種目準優勝者、様々な専門分野の国際学会等ですぐれた研究を自身で発表し表彰を受けた大学院生、卒業時各学部学科の成績最優秀者など学業に対する努力が顕著な者、また人間性、創造性を錬磨するために、課題を設定して行う「文芸コンクール」「スピーチコンテスト：日本人 英語、留学生 日本語」「創造



力啓発コンテスト」などでの優秀者などがあります。そのほかにも課外活動を支援する後援会、同窓会からの財政援助などがあります。

学生の潜在的な能力を引き出し、資質向上を図り、活力を生み出すことこそ教育の要諦であると考えておりますが、例えば現在経営情報学部の学生約30名によって立ち上がった学生ベンチャー事業が、IT関連サービスなど地域への貢献を果たしている例などは生きた教育の成果としても注目に値すると考えております。

皆さんがこれからの4年間、社会から期待されるどれだけの付加価値を身につけることが出来るか、また自身納得のゆくような自己啓発がなされるか、それは皆さん一人一人の意欲と努力に大きく依存いたします。“人と違う自分の個性・能力はこれだ！”と誇れるものを是非在学中に見出し、磨き上げ、自己のアイデンティティを確立するよう努めて頂きたいとお願いいたします。

世界一の秀峰富士を仰ぎ、壮大な夢を描きつつ、生き生きとした学生生活を送られんことを心から期待し、皆さんへの歓迎の辞といたします。入学おめでとう。

## 誓いの言葉

新入生代表 経営情報学部経営情報学科 諏訪 幸子

やわらかな春の日差しが降りそそぐこの季節に、私たちは憧れの静岡県立大学に入学することができました。本日は、私たち新入生のために、このような盛大な入学式を執り行っていただき、誠にありがとうございます。

また、ただ今は、学長先生を始めご来賓の皆様方からの温かい激励とお祝いのお言葉をいただき、新入生一同大変感謝しております。心から御礼申し上げますとともに、この感激を胸に、志を高く勉学に励んでまいりたいと存じます。

現代は高度情報化社会という大きな変革期にあるといえます。パソコンやインターネットだけでなく、携帯電話やデジタル放送などの情報通信技術は私たちの生活に大きな変化をもたらし、社会のしくみやライフスタイルまで変えてしまっています。

情報技術・ITは、21世紀の発展のための基盤として、経済構造改革の実現や産業活動の効率化を促進するとともに、生活面では多様なライフスタイルの実現や利便性をもたらす鍵とされ、日本政府は、IT革命推進を重要な戦略課題として、2001年に「高度情報通信ネットワーク社会形成基本法」を施行し、5年以内に世界最先端のIT国家となることをめざす、と発表しました。

情報通信技術の急速な普及・発展の中、等しく情報化の恩恵を享受するためには、それらを自由自在に使い、その情報の価値を判断する能力を習得する必要があります。ネットワーク化された社会では、情報に関する学習はますます重要になってくるでしょう。

このようなことが、私が静岡県立大学経営情報学部を選択した理由でもありますが、本日入学を許可されました586名のものは、薬学、食品栄



養科学、国際関係学、経営情報学、看護学と目指す専門はそれぞれ異なりますが、21世紀を支える原動力となるため、日々精進努力してまいりたいと考えております。

本日新しい一歩を踏み出すことにより、いままで知ることのできなかった世界や新たな自分を発見する機会に巡り会え、両親を始めこれまで私たちを支えてくださった方々への感謝の気持ちを再確認するのではないかと思います。

新しい出発をするということは、希望でいっばいの反面不安もあります。しかし、これからの4年間を大切に、勉学や課外活動を通じ、今後ますます進展する科学技術や国際化、また情報化社会の発展に大いに貢献できるよう、それぞれの専門性を高めつつ、自分自身の礎を築いてまいりたいと思っています。

とは申しませんが、私たちはまだまだ未熟です。勉学の仕方ひとつとっても予想がつかないというのが、正直な気持ちです。そうした私たちを、学長先生を始め、諸先生方、諸先輩方には、厳しくご指導下さるようお願い申し上げますとともに、今日の感激を糧に、日々研鑽してまいりますことを改めて決意し、誓いの言葉とさせていただきます。

## 平成15年度静岡県立大学大学院 入学式式辞

静岡県立大学長 廣部 雅昭

本日ここに平成15年度、静岡県立大学・大学院入学式を挙げるにあたり、現在の激しく変わる学内外の諸状況と、その中でこれから大学院生活を送る皆さんに対し、激励とともに幾ばくかの心構えなどを申し上げたいと思います。

まず本年度大学院に入学を許可された5研究科合計168名の皆さんに対し、大学を代表して心からのお祝いと歓迎の意を表したいと思います。

皆さんは、大学の学部教育あるいは修士課程での研鑽を経て、高度専門職能人あるいは研究者としての道を歩むべく、より高度な専門的知識、技術の修得を目指し、大学院に進学されたことと思います。しかし皆さんを受け入れる大学も、卒業後皆さんを待っている社会も、今や大きく変貌しようとしております。周知のように、来年度から全ての国立大学は独立法人化され、それぞれ存亡をかけた自立的経営や個性ある研究・教育を模索せざるを得なくなりました。国際競争力を高める必要に迫られているわが国にとって、大学の質的変革、大学人の意識改革が極めて重要であるとの認識に立つものであり、これは国公立を問わず、全ての大学に投げかけられた、いわばカルチャーショックとも言えます。

これからは、大学における教育、研究、社会貢献、運営体制など全てにわたり、厳しい外部評価が行われ、その結果に基づき研究費等の資源の重点配分などが行われることとなります。とくに評価は、大学が設定する目標、研究教育計画などに対して、従来重きが置かれていた事前評価に加え、



成果に対する厳しい中間・事後評価が行われることとなります。つまりアドバルーンだけ上げて、目標達成への真剣な努力をせず、成果を上げていない取組などは評価しないとすることで、ある意味では当然のことと言えます。

大学人はこれまで評価というものに拒否反応を示すことが多く、「学問・研究の自由を侵すものである」「地道な基礎研究や、伝承的な学問が軽視されることになる」などの声をよく耳にいたしますが、必ずしも当を得た議論ではないと思っています。私はどのような時代が来ようとも、大学から「学問・研究の自由」や「基礎研究」が失われたら、存在意義そのものが問われると考えております。むしろ真に正しい評価によって「何もしない自由」や「行う意義が説明できないような研究」などを排除することで、本当の意味の「学問・研究の自由」や「基礎研究の重要性」が主張できるものと思います。

いずれにしても、これからの時代は、社会の評価に耐える個性的な実績を上げ、積極的にアピールし、大学の存在意義を高めて行くことが、21

世紀の大学像として求められている「競争的環境の中で個性の輝く大学」作りの基本であると考えます。

午前中の学部入学式でも触れましたが、昨年度文部科学省は、日本の大学が世界トップレベルの大学と伍して競争するために、教育・研究のレベルアップを図ることを目的として、国公私立大学全ての中から、個性的で優れた研究計画を有する大学を重点的に支援する「21世紀COEプログラム」を発表いたしました。本学からは大学院薬学研究科と生活健康科学研究科の研究を「健康長寿・薬食同源」をキーワードに融合した、研究拠点形成計画を申請し、学際・複合・新領域部門で採択されました。全申請数163大学464件中、採択されたのは、50大学113件で、その中の一つに選ばれたことは、規模の小さな公立大学でも、地域特性などに根ざした特徴的なオンリー1の研究・教育を、異分野融合による連携協力によって世界レベルにまで高め得る可能性を示した点で画期的なことで評価されています。COEの採択は、研究のこれまでの実績と今後の研究・教育計画、大学の将来構想がともに評価の対象になったもので、今後はその評価に応え得る実績を示して行く必要がありますが、従来の科学研究費と異なる点は、COE予算の中に、国際的に通用する優れた若手研究者育成のための教育経費が大幅に認められた点であります。本学も、国内外からのポストドクの採用、大学院生を含む若手研究者の国際学会などへの海外派遣、TA（ティーチングアシスタント）制度の充実などを積極的に進めて行く予定ですので、院生の皆さんも大いに研鑽努力をして頂きたいと思っております。

特に博士課程の院生が主として対象となるTA制度は、将来の研究指導者としてのトレーニング

の意味がありますが、研究を行う上で教育者としての資質は欠かせないということを強調したいと思っております。よく「講義で聴いた事は10年後5%しか残らないが、人に教えたことは90%残る」と言われております。自分がその本質を理解していなければ、人に理解させることは決して出来ない」ということと同義であります。

研究を進める際に、その意義や本質が理解できていなければ決して成果は上がるものではありません。大学における研究と教育は表裏一体でなければならないと主張する理由の一つはここにあります。

「オンリー1はナンバー1に通ずる。地域特性を基盤に、内なる学際化で世界に通ずる先導的学術研究領域の創成と推進を図る」これが本学の目指したCOE構想の理念であります。同一研究分野で競合する数多の中からナンバー1の座を勝ち取る快感も重要ですが、独創性やプライオリテイの帰属に関しては、往々にして曖昧になり勝ちであります。それに対し、オンリー1は研究に限らず、単独の存在ですから、プライオリテイの帰属は明確であり、少なくとも当初はナンバー1でもあります。またナンバー1は一つなのに対し、オンリー1は、アイデア次第で誰にもチャンスがあることです。問題は、その独創性や成果が高く評価されるとともに、後発組の追隨を許さず、広がる裾野を見下ろす頂点の座を常に維持し続けることが出来るかどうかにかかっていると言えます。

独創的な研究は、既存の領域よりは、新しい学際的な領域の中に高い確率で、そのシーズが潜んでいると考えておりますが、それは他（人）が創った学際領域の中で偶然発見されるものではなく、自ら設定した課題を実現するために、自らが複数

の領域を、頭の中で組み合わせて創出した独自の学際的領域や新領域の中で見出されるものであると考えます。つまり学際的・複合・新領域なるものは、個人の発想の中では無数にあってしかるべきなのです。そしてその創出を可能とするのは、幅広い専門的知識の集積によって培われた発想力、洞察力、それに加えて、持続的な夢・好奇心・信念（執念といった方がよいかもしれません）・実行力であると思っております。真に独創的な研究には手本がありません。パソコンをいくら叩いても出てくるものでもありません。優れた着想に基づく、注意深い研究者による実験とその結果の綿密な解析によって得られる閃きから生まれるもので、これは古今東西変わることはない真理であると私は信じております。

実は本日の式辞の中で、昨年まで3年間続いた日本人ノーベル賞受賞者4人の比較論を展開し、ノーベル賞は、同一分野のナンバー1よりは、未知なる分野での、きわめてインパクトの大きな発展性の高いオンリー1の業績に与えられるものであるということを申し上げようと考えておりましたが、この後の第2部として、浜松ホトニクス社の社長特別講演があり、おそらく、その点を含めた社長独特の持論が展開されると思っておりますので、そちらに譲ることといたしました。

大学の研究は基本的には今述べたような個人の知的活動の集積によって支えられるものであり、これらを助長する環境、組織体制づくりが重要となります。COE構想の中に記した本学の将来構想の一つとして、「新領域創成総合センター」を創設し、部局横断的新領域の研究拠点を育成することを提案しております。今回のCOE拠点はその第1号と位置付けておりますが、新年度早々に構

想の具体的検討に入ることであります。将来的には博士課程のみを有する新大学院研究科とし、文理融合型の研究部門も含めて、既存の全ての大学院部局との連携の中で、学際的で高度な研究教育の拠点を形成することを思い描いておりますが、これはあくまでも未だ学長個人のレベルでの構想であることをお断りしておきます。

「21世紀COEプログラム」の中で謳われている目的は、「世界最高水準の研究成果の創出と人材育成」ということであり、本学は、国際的にもレベルの高い「オンリー1」の研究・教育の成果を出すことが求められております。一般的に新領域の研究は、当初それを理解させ、正しい評価を得るために相当の努力を要しますが、国際学会等の舞台上で積極的に発表し、批判や議論を謙虚に受け止め必要によっては軌道修正をはかること、また国内外の研究機関との連携によって研究の推進をはかりつつ、理解を深めてもらうことなども大切なことであります。

そのような意図も含め、本学では大学院充実の一環として、薬学研究科と県立総合病院、生活健康科学研究科と県工業技術センターとの間でそれぞれ連携大学院協定を締結し、共同研究なども推進して行くことといたしました。これらは研究教育の幅を広げると同時に、社会のニーズに貢献することを可能といたします。さらに現在は外国の大学との間で連携大学院を含む交流協定締結の準備も進めております。

一方国際関係学研究科においても、本年1月に研究科付設の「先端的現代韓国朝鮮研究センター」を創設し、近年脚光を浴びている朝鮮半島問題研究のオンリー1拠点の形成を目指しております。こ

のように、大学における研究教育のレベルアップのためには、常にハードルを高く設定することが重要であり、このような積み重ね一つ一つが大学の活性化に繋がる道であると考えております。

現在大学院教育に求められている課題は何か。修士課程と博士課程の違いは何か。産学連携への大学・大学院のかかわり方、その問題点。大学人の知的財産権に対する意識の変革の重要性など語るべきことは多々ありますが、すべて昨年の大学院入学式等で述べておりますので、過去の大学広報誌「はばたき」を参照して頂くこととしてここでは割愛し、本年はCOE構想を中心として、今

後本学が取り組んで行く方向性等について述べて頂きました。

大学を取り巻く環境は、皆さんが考えている以上に急速に変化しております。しかし「努力するものが報われる」方向に進んでいることは疑いのないところで、大学も個人も競争的環境の中で、いかに個性を磨き、オンリー1の自己を啓発して行くことが出来るかにかかっていると云えます。皆さんは新しい時代を担う知的活動の推進者としての自覚と誇りを持って、日々研鑽に努めて頂きたいということを申し上げ、大学院入学の歓迎と激励の挨拶とさせていただきます。

## 県立大学「ファーマカレッジ2003」参加者募集中！ ～体験してみよう、「病気を治す薬の開発」～

高校生が大学の研究者、大学院生から直接指導を受け、実験や実習を通じて科学的なものの見方を養い、科学に接する喜びを体験することにより、科学に対する興味や理解を深め、将来の夢や希望を育てることを目的に、県立大学薬学部ではファーマカレッジ2003を開催します。

- 日 時** 平成15年7月31日（木）から8月1日（金）までの2日間  
9：30～17：00（2日とも）
- 場 所** 静岡県立大学 薬学部（所在地：静岡市谷田52-1）
- 対 象** 県内高校生35人程度（2日間とも参加できること）  
なお、応募者多数の場合は、書類により選考する。
- 応募期限** 平成15年7月1日（火）必着
- 参加費用** 300円（傷害保険料）
- 問合せ・申込み先**

参加申込書に必要事項を記入し、下記あて郵送のこと。  
静岡県立大学薬学部 ファ - マカレッジ2003 係  
〒422-8526 静岡市谷田 5 2-1 TEL:054-264-5106  
ホームページ：<http://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/>

### <プログラムの概要>

21世紀を迎え、不幸にして病気になった身体を元気で健康な身体に戻す為に、効き目が確か安全なくすりが必要とされています。これら社会的要請に応えるべく、薬学部ではもとより良いくすりの開発、病気の原因や進行過程の解明など、ライフサイエンスに関わる最先端の研究が行われています。また、くすりが正しく、より効果的に使われるように医療と直結した教育・研究に加え、健康の維持・増進に関わる教育・研究も進められています。

本プログラムでは高校で習う化学、生物、物理などの知識がどのように応用され、「いのちを守るくすり・いのちを救うくすりの研究・開発」に役立っているかを県内の高校生に実感してもらいます。

# 平成14年度静岡県立大学 卒業式式辞

静岡県立大学長 廣部 雅昭

平成14年度静岡県立大学学部卒業式、大学院学位記授与式が3月20日、本学の大講堂で行われた。石川嘉延静岡県知事をはじめ、多数のご来賓、ならびに保護者の出席のもと、廣部学長が式辞を述べた。

本日ここに石川静岡県知事はじめ、ご来賓各位、ならびに多数の保護者の方々のご参列を賜り、盛大に平成14年度静岡県立大学学部卒業式ならびに大学院学位授与式を挙げて参りますことは、真に喜ばしいことであり、関係者一同心より厚く御礼を申し上げます。次第です。

まず始めに、これまでの研鑽が実り、本年度めでたく卒業される5学部519名、大学院研究科修士課程129名、同博士課程14名の皆さんに対し、大学を代表し、心からのお祝いを申し上げますと存じます。特に本年は、新設の大学院看護学研究科から第一期生が卒業されます。重ねてお祝いを申し上げます。またこの日を待ちわび、感慨を分かち合っておられるご家族の皆様方のこれまでのご理解、ご支援に対しましても、心からの敬意と感謝を申し上げますと存じます。

4年前私が学長に就任して最初に行った仕事は、今日卒業する4年生の皆さんを本学に迎える入学式で、式辞を述べたことでもあります。そこで私は三つの事を申しました。

まずその一つは「目標を定め、しっかり学べ。学ぶということは、知ることとは異なる。学ぶとは、自らの意思で、積極的に知ろうとする姿勢と、それを何かに役立てたいという意味が伴うものであり、知的好奇心が掻き立てられるよう



でなければならない。」2番目は、「何事にも感動する心を持って。無気力、無関心、無感動から得られるものは何もない。」3番目は、「風当たりの強い山の尾根を歩け。視界を広く保ち、相対立する考え方などを良く知り、判断力を養い、自らのしっかりとした意見を持ち、かつ行動せよ」おおまかに言えば、以上の3点でありました。

今皆さんは、自身の4年間の学生生活を振り返り、どのような自己評価が出来るでしょうか。社会も大学もこの4年間は、世紀の変わり目ということもあってか、良きにつけ悪きにつけ大きく変貌いたしました。その変化の中で、自身何を学び取り、何を感じ、何をを行い、また自己啓発が出来たと考えておられるでしょうか。

大学の卒業とは、雛鳥が初めて巣箱から厳しい原野に放たれることにも例えられる「人生の厳粛な節目」であり、これから大学院に進学し、しばらく大学での研究生生活が続く人達にとっても、その自覚は持たなければなりません。自らを省みることが出来る人は、そこから新しい展開を図ることが出来る人であり、進歩・改善が望める人であり、卒業を機に、是非これまでの自分を総括

して、明日に向けてのジャンピングボードとして頂きたいと思います。

ここに晴れて出席できた皆さんは、自らの反省・評価の上に立って、これからの人生の中で、新たなチャレンジが出来る点で恵まれているといえます。しかしこの4年間、しっかりと自らの目標を定め、想像を絶する苦難と闘いながら、おそらく本人にとって悔のない充実した勉学生活を送り、好成績で卒業資格を取得し、当初から望んでいた就職先までも内定しながら、卒業式を目前にした去る日、忽然とこの世を去った皆さんの仲間の話をしてはまいりません。その人は、看護学部4年の長倉ゆきのさんです。今日はご家族の胸に抱かれた遺影として卒業式に参列しております。

長倉さんは、発症率数万人に一人という原因不明の小腸疾患に罹り、生後6日目から8年間も県立こども病院に入院、その後も一年の半分は入院生活を余儀なくされる中で、周囲の心配を押し切って、自らの強い意思で、公立高校まで頑張り通し、さらに自身の体験を通して得た人生観に基づき、看護師の道に進むべく本学看護学部に入學、一日9時間にも及ぶ栄養点滴を行うなど、様々なハンデを自ら習得した技術で克服しながら、他の人達と全く同じカリキュラムのもと、授業や臨地実習もこなし、極めて優秀な成績をあげました。そして目指した小児看護への道を求め、かつて長期間お世話になった県立こども病院への就職も決定し、あとは今日の卒業式を待つばかりでした。

在学中はハンデを克服するために、人の倍以上の時間をかけて勉学に励む一方で、「自分の出来ることは何でもやる」と、勉学の合間には障害児支援のボランティア活動に参加するなど、まさに超人的な活躍をいたしました。しかし過酷な天命は、奇跡をもたらすことなく、燃え尽きるがごとく、



その太く、短い22歳の生涯に終止符を打ちました。4月から着用する予定であったピンクの看護服を身にまとった棺の中の彼女は、満足感に微笑んでさえいるようでしたとの事です。ご家族の方々のこれまでのご労苦、無念なご心中は察して余りありますが、友人や周囲の多くの方々の支援があつてこそ可能であつたとも言えるでしょう。それらに報いるために、密かにドナー登録をしていた彼女の遺体からは角膜が提供され、新しい小さな生命として生き続けることとなりました。

明確な目標を立て、それに向けて、しっかり学び、安易な道は選ばず、あらゆる困難を、ひたすら努力することで克服し、挫折したとはいえ、一定の目標を達成し得たことは、本人はもちろん周囲の人々に大きな感動と教訓をもたらしました。本人の学んだことは、学校より自分自身の体験の中から導き出したことの方がはるかに多かったことと思います。これこそ教育の奥義というべきもので、自ら求めて得たものの方が、はるかに成果も、うける感動も大きかった筈です。長倉さんの場合、実社会で活躍できなかったことは、かえすがえすも残念ですが、その志は、命の尊さとともに、同じ道を目指す多くの友人の心の中で生き続けることと確信しております。本学は長倉さんの、他の範となる超人的努力に対し「はばたき賞」を授与いたしました。

さて、今年の式辞は、非常に不安な気持ちの中で作りました。もし対イラク戦争が勃発したならば、式辞は作り変えねばならないと考えていたからであります。残念ながら、その不安は的中してしまいました。今この時点では、回避されてはおりますが、最早時間の問題で、戦争は避け得ない状況にあると言えます。一昨年のニューヨークの国際テロに端を発した、血で血を洗う争いは、再び世界を戦争という泥沼の中に引き込む極めて危険な状況にあると感じております。

かの第二次世界大戦が終わって約60年、その間局地的な戦争はあったものの、その範囲で留まって来たのは、平和と繁栄を願い、命の尊さを学習した人類の英知のしからしむる所と考えておりましたが、人間の英知なるものの脆さか、悲惨な戦争の体験者が少なくなってきた世代変わりの時期が、再び歴史を繰り返させることになるのか、暗澹たる気持ちであります。今世界の世論は真二つの様相を呈しておりますが、「戦争か平和か」という分かりきった単純な二者択一的論議ではなく、それを脅かす真の原因はなにか、その拠って来る背景などを正確に知り、正しい判断と真に有効な解決策を、共に模索する姿勢が、今世界に問われているのではないのでしょうか。その点日本人は、正しい判断を可能とする十分な情報が与えられていない苛立ちもありますが、いささか鈍感で、かつ主体性にも欠けているような気がしてなりません。戦争を直接左右する力は持ち得ないとしても、事態を直視し、自国の、そしてわれわれ自身の問題として、真剣に考えるべき時ではないでしょうか。「戦争のための戦争か」、「平和のための戦争か」それは歴史が評価することになりますが、いずれであれ、起こりうる諸々の結果について、世界中の人間が、後世に共同の責任を負わねばならぬ自覚が必要であると思います。

冒頭に申し上げたように、「狭い山の稜線に沿っ



て歩くのは、風当たりの少ない一方の鞍部を歩くより、はるかに難儀であっても、右側も左側も良く見え、全体をよく把握でき、進むべき方向を誤ることが少ない。」これは相対立する様々な意見を知り、自分自身の判断と方策を考える上で極めて大切なことであるということを行ったものですが、特に情報化時代の今日、氾濫する様々な情報の中から、いかにして正しい有益な情報を選別することが出来るかが鍵になります。また判断力を支えるものは、学んで得た広い学識と経験によって培われた洞察力とともに、正義感と批判精神も大切な要素となります。皆さんがこれから社会に出た時、あらゆる点で直面する事ではありますが、このような力を大学でどれだけ体得し得えたか。無気力、無関心、指示待ち族に甘んじて来た人達は、これから味わう社会の厳しさの中で思い知らされるに違いありません。これからは自分自身のしっかりとした考え、意見を持ち、臆せず提言できる積極性が求められる時代であります。その自覚をもって今後大いに研鑽努力をして頂きたいと思ひます。

次に、大学院の修士課程あるいは博士課程を修了し、めでたく学位を取得し、高度な専門職、あるいは研究者の道を目指す皆さんに対し、一言申し上げたいと思ひます。

昨今の暗い世相の中にあつて、唯一私達に明る

い希望をもたらしてくれたものは、昨年の日本人のノーベルダブル受賞であったと思います。とくに島津製作所の田中博士の受賞は、企業研究者に夢と希望を与えた点で画期的なことでした。受賞対象となった両氏の業績について、ここでは述べませんが、長年持ち続けた壮大な夢を、奇想天外な実験手法によって実現した小柴博士は、いわば「課題探求型」、閃きの中から難問を解決し、応用価値の極めて高い手法を開発した田中博士は「問題解決型」とも言える、それぞれ基礎研究、応用研究に相当するものであります。お二人に共通する所は、それぞれ明確な目的をもって、その実現に、信念と執念をもって取り組んだ点にあると思います。独創性とは、人と同じ事を考え、実行することからは決して生まれたいことは自明の理であります。当初は学会などからも無視、嘲笑されるような荒唐無稽なものの中にも、真に独創的なものが潜んでいる可能性があります。ノーベル賞は、同一分野でのナンバー1よりは未知なる分野での極めて発展性の高いオンリー1の業績に与えられると言って良いと思います。それを可能にするものは、持続的な夢・信念・洞察力・実行力であると思います。田中氏の快挙は、「もしかしたら自分にもチャンスがあるかも知れない・・・」と多くの人達にノーベル賞を身近に感じさせた点でも意義がありますが、閃きも周辺知識や研究動向を熟知した上でのことで、僥倖に頼って実現するものでは決してありません。これから大学院で指導をうける人も、また研究者として独立し、それぞれの道を開拓する人も、大きな夢を持ち続け、挫折を恐れず、自分独自の考え、発想を大切に、それぞれの目的を達成するよう不断の努力を重ねて頂きたいと思ひます。

おわりに本学に学び、この度卒業を迎えられた、学部17名、大学院13名、合計30名の留学生の皆さんに対し、心からのお祝いと激励を申し上げ

げたいと思ひます。長引く経済不況の中にあつて、留学生活は決して容易ではなかったことと察しています。しかしそのような状況の中にあつても、皆さんに対し支援を惜しまれなかった地域の多くの方々の温かい気持ちは、大きな励みになったことと思ひます。留学の目的は知識や技能の習得もさることながら、異国の文化に対する相互理解を深めることにあると思ひます。現在本学には13カ国約100名の留学生が学んでおりますが、国籍、思想、信条を超えて、お互いがそれぞれの文化、考え方を学び、理解を深め、認め合うことが、真の国際化、グローバルイズムの原点であり、現在のような国際的緊張状態は、それとは逆行するものであると言わざるを得ません。留学生の皆さんが、将来国際平和の立役者となって下さることを心から願う次第です。

学長として初めて4年前に迎えた皆さんを、ここに送り出す感慨は、果たして皆さんの期待に応え得る十全の大学運営をなし得たであろうかという自己反省を含め特別のものがあります。敢えて入学式の際の言葉を引用しつつ、社会に巣立つ皆さんに対し、卒業のお祝いを申し上げますとともに、「流れに吞まれず、自己を確立せよ」と言うことを付け加え、私のはなむけの言葉といたします。ご卒業おめでとう。



## SARS（重症急性呼吸器症候群）の対応について

本学は、重症急性呼吸器症候群（SARS）感染を防止するため下記の措置を学生の皆さんにお願いしています。

1. WHO公表のSARS伝播確認地域への不要不急の渡航は延期又は差し控えてください。
2. 地域を問わず海外に渡航（帰国）する場合、学生部学生課学生係まで届け出てください。
3. WHO公表のSARS伝播確認地域へ渡航した人は、帰国後10日間は健康観察期間として人に会うのを最小限にするため登校を遠慮してください。
4. WHO公表のSARS伝播確認地域へ渡航した人は、帰国後速やかに本学学生部学生課医務室（054-264-5117）へ電話連絡するとともに、38度以上の発熱、せき、呼吸困難などの症状が1つでも出た場合は、最寄りの健康福祉センターまたは保健所（静岡県ホームページ参照）に電話連絡してください。
5. SARS伝播確認地域を経由する場合も、上記1・2・3・4の扱いとします。

### 健康福祉センターまたは保健所の連絡先

平日昼間（8：30～17：15）

名称	電話番号	住所
伊豆健康福祉センター	0558-24-2035	下田市中531-1
熱海健康福祉センター	0557-82-9118	熱海市水口町13-15
東部健康福祉センター	055-920-2075	沼津市高島本町1-3
御殿場健康福祉センター	0550-82-1222	御殿場市電1113
富士健康福祉センター	0545-65-2205	富士市本市場441-1
静岡市保健所	054-255-7811	静岡市追手町10-100
志太榛原健康福祉センター	054-644-9299	藤枝市瀬戸新屋362-1
中東遠健康福祉センター	0538-37-2244	磐田市見付3599-4
北遠健康福祉センター	0539-25-3143	天竜市二俣町二俣530-19
西部健康福祉センター	053-458-7176	浜松市東田町87
浜松市保健所	053-453-6118	浜松市鴨江2-11-2

### 平日夜間（17：15以降）と土・日・祝日

浜松市以外の方		浜松市の方
静岡県 救急医療情報センター	伊豆地区 0558 23 1426	浜松市役所
	東部地区 055 929 6770	守衛室 053
	中部地区 054 247 1199	457 2066
	西部地区 053 457 1198	

SARS関係の情報は次のホームページより得られます。

WHO <http://www.mhlw.go.jp/topics/2003/03/tp0318-1e.html>

静岡県 <http://www.pref.shizuoka.jp/kenhuku/kf-02/kansen/data/sarstop.htm>

厚生労働省 <http://www.mhlw.go.jp/topics/2003/03/tp0318-1.html>

国立感染症研究所 <http://idsc.nih.go.jp/others/urgent/update.html>

WHOのホームページ【英語】(Homepage of WHO) <http://www.who.int/csr/sars/en/>

米国CDCのホームページ【英語】(Homepage of CDC,USA) <http://www.cdc.gov/ncidod/sars>

## 副学長に大野忠氏を招聘

学長 廣部 雅昭

平成15年度より、これまで諸般の事情により空席となっていた副学長（専任）ポストに、静岡県生涯学習振興財団理事長 大野忠氏を招聘することが、3月の評議会において承認されました。周知のように、現在わが国の大学を取り巻く諸状況は大きく変貌しようとしております。平成16年度より全ての国立大学が独立法人化され、それに伴い公立大学も「公立大学法人」としての道を歩むことが、ほぼ既定の路線として考えられております。国立大学の推移が不明確な現時点で、具体的な時期や内容について論ずることは適当ではありませんが、その拠って来る背景を直視し、新しい時代における大学のあるべき姿を考究しつつ、自律的な変革を進めることは、法人化問題と切り離しても極めて重要なこととあります。

公立大学である本学は、静岡県における「知の拠点」としての自負をもって、教育、研究を通じて一層の社会貢献を果たす責務がありますが、そのためには、より開かれた大学として、地域社会との間に太いパイプを形成し、ニーズの把握とシ

ーズの発信を円滑に進め得るよう、双方向的な関係を強化する必要があります。例えば産学連携や生涯学習・高大連携を含む地域教育連携など、増大する地域社会のニーズを大学の教育・研究に的確に反映させ、地域貢献の実を上げる仕組みの構築が必要です。また一方で今後の趨勢となる大学運営への学外有識者の参画など大学と社会との連携強化が必須となると考えられます。

このような観点から、今後益々多様化する多くの課題を抱える大学行政の中核にあって、学長の補佐機関としての副学長職に、教育行政、県行政にも精通し、本学参与、県教育研修所長、県教育長、県出納長などを歴任された大野忠氏を招聘できたことは極めて時宜を得たものと考えております。今後社会の要請に対し、大学として変革すべき点と、変えてはならない守るべき普遍的な事柄との擦り合わせを十分はかりながら、理想的な新大学像を模索して参りたいと考えております。各位のご理解とご協力を切に願う次第です。

## 日本医療薬学会論文賞を受賞

看護学部 濱井妙子助手他

看護学部の濱井妙子助手、志賀由美講師、西垣克教授らが2002年10月20日（日）福岡市のアクロス福岡で行われた第12回日本医療薬学会年会で日本医療薬学会論文賞を受賞した。受賞論文は、濱井妙子、木村緑、鈴木崇代、見崎芳枝、志賀由美、西垣克。病院薬剤師における業務内容の分類法と定量的分析、医療薬学、27、193-204。

この研究は静岡県立総合病院薬剤部の先生方との共同研究で、タイムスタディ法により病棟専任薬剤師の業務内容と業務量の実態を明らかにし、その業務の特性や役割、薬剤師配置基準について論じたものである。



## 意欲、集中力、継続力

副学長 大野 忠

このたび、4月1日付けで副学長に就任しました。よろしくお願い致します。

4月といえば14日のニュースには目を見張りました。これまで日米欧など6カ国で、ヒトゲノム（人間の全遺伝子情報）の解読が進められてきましたが、この日、関係各国首脳により「解読完了」の共同宣言が発表されたのです。遺伝子の解明によって、すべての生物は遺伝子から出来ているというのか、遺伝子を持っている。つまり、地球上に生息する約400万種の生物は遺伝子でつながっており、その点で、すべての生物は親戚であるといえます。遺伝子の研究から、生物の進化の軌跡をたどることも出来るでしょう。

遺伝子工学の権威である筑波大学の村上和雄名誉教授の講演で、遺伝子解読の苦労話を拝聴したことがあります。村上先生は言っています。「ノーベル賞をもらった人の遺伝子のならび方と普通の人のそれは、わずか0.1%の違いしかない。逆にいうと、偏差値がどうだろうがハンデがあるが、人間は99.9%同じ可能性を持って生きている。0.1%を比較して、その差ばかりを問題にしている」。脳の構造や機能の解明は著しく進んでいます。それによると、私たちの脳は全部が働いている訳ではなく、かなりの部分は遊んでいるか眠っているといえます。つまり遺伝子が眠っているのです。そして、感動や目的をもつとき、その眠っている遺伝子が目を覚ましはじめるのではないかということです。

そこで思うのですが、勉強でも何でも、要は、ものごとに取り組む意欲（好奇心）と集中力と継続力の三つが非常に大切であり、この三つの強弱が成果に多大の影響を及ぼすのではないかと、ということです。教師の仕事は学生の意欲や好奇心を

いかに引き出すかが最大のポイント。意欲のかきたて役こそ教師の最も大切な仕事といってよいでしょう。意欲を持つてことに当たることこそ、遺伝子のスイッチをONにすることになる。



作家の住井すゑさんは長編ドキュメンタリー映画『百歳の人間宣言』で言っています。人間に全く平等に与えられているものは「時間」です。「時間切れ」が死であり寿命であり天寿です。生きている間は、人によって時間の長短がある訳ではない。平等にもつ「時間」をどう使うか……。

私事で恐縮ですが、大学の4年間で1部屋4人で20室80人収容の寮で生活しました。全ての学部の学生がいました。なかには備えつけのロッカーの中は本だらけの学生がいました。驚きました。学生諸君には、とにかく多読をすすめたい。新書本と文庫本でいいのではないかと。教養書、啓蒙書としてありとあらゆるものがあります。1日30頁を毎日継続して読めば、1年で1万頁をこえます。200頁の新書なら50冊読める。1日60頁なら100冊です。まさに継続こそ力です。習慣化することです。自分の持ち時間を有効に使いこなすことです。天才ゲーテでさえ「天才というのは努力する才能である」と言っています。

情眼をむさぼっている遺伝子は眠ったままです。安定のなか、あるいは前例踏襲も然り。ある企業人は「安定に爪を立てよ」と言っています。この変化の激しい時代にあって守りの姿勢だけでいたら見捨てられます。何事も攻めの姿勢で柔軟に対応したい。それが自己の意識改革にもつながると思います。

平成12年の国の大学審議会答申では「教養教育の復活」を掲げています。タテ軸に専門性、ヨコ軸に視野の広さをとると、「専門だけ」の人間をI型人間、「幅広い視野と深い専門性をもつ」人間をT型人間とし、後者こそ求める人間像であるとしました。たとえば地面にある深さまでの穴を掘

る場合、問口をある程度広くしたほうが掘り易いし、石ころなど障害物にぶつかった場合はなおさらです。T型人間の方が、柔軟で発想豊かなのではないのでしょうか。学生諸君には、幅広い教養と知性をそなえた人間となって社会に貢献してほしいと願っています。

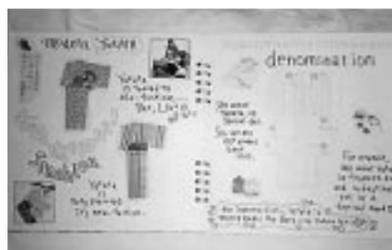
# JAPANESE BOOK

- original magazine -

国際言語文化学科 3年 松浦 千草

JAPANESE BOOK。「日本のいま」を伝えるために私が作った手作りの本を紹介したいと思います。これは、言葉では表せない文化の形をできるだけダイレクトに表現するために写真や雑誌の切り抜き等をコラージュし、英語の説明を加えてまとめたものです。この本が最も活躍したのは2002年の夏、ニューキャッスル語学研修の時でした。コミュニケーションの手段、文化交流の材料として、また他国の友達を作るきっかけにもなりました。さまざまな国での日本文化の印象なども知る良い機会となりました。これから海外に行く人は、日本文化を発信する方法として、参考にしてもらえたら光栄です。このJAPANESE BOOKを通して、さらに日本の文化に興味を持ってくれる外国人を増やしていくこと。これが私の願いです。

**内容：** 基本情報 人口・言語・GDPなど  
ファッション・ゆかた、食文化・カフェ事情、音楽について、広告・携帯・自動車、習字・花火・舞妓さん、他



「ゆかた」は世界でも美しい、と人気。



日本人はおしゃれ 有名



本を見てくれた人に感想を書いてもらいました。

## 科学研究費採択状況

平成15年度 科学研究費採択状況

年度	申請件数	採択件数	採択率
H11	176	63	35.8%
H12	194	59	30.4%
H13	181	53	31.0%
H14	210	64	30.5%
H15	214	72	33.6%

平成15年度 部局別採択状況

部局別	申請件数	採択件数
薬学部	90	24
食品栄養科学部	34	8
国際関係学部	15	8
経営情報学部	17	3
看護学院	25	8
院生活健康科学研究科	34	8
合計	210	64

\* 国際関係学研究科は国際関係学部、環境科学研究所は生活健康科学研究科に併せ計上  
\* 申請件数、採択件数ともに継続課題を含む

## 平成15年度 新規採択されたテーマ

<b>基盤研究(B)(1)</b>	菱田雅晴 国際関係学部教授	現代中国における社会の自律性に関する学術調査
-------------------	---------------	------------------------

<b>基盤研究(B)(2)</b>	野口博司 薬学部教授	植物生合成工学による新規非天然型化合物の創製
	横越英彦 食品栄養科学部教授	心身ストレスのバイオマーカーの検索と食品成分による情動制御に関する研究
	奥直人 薬学部教授	構造認識標的化プローブを用いた腫瘍新生血管傷害療法の確立

<b>基盤研究(C)(1)</b>	中山 勉 食品栄養科学部教授	植物ポリフェノールの脂質および蛋白質との相互作用
-------------------	----------------	--------------------------

<b>基盤研究(C)(2)</b>	渡辺達夫 食品栄養科学部助教授	トウガラシ辛味関連化合物の調理における変化測定と安定化
	相馬光之 環境科学研究所教授	堆積物中の光合成色素を指標とする湖沼環境変遷の解明
	五島廉輔 環境科学研究所教授	芳香族系環境汚染物質への紫外線・放射線曝露による構造と生物活性の変化
	加藤善久 薬学部講師	PCBの甲状腺ホルモン攪乱作用における動物種差とその作用機構の解明
	剣持久木 国際関係学部助教授	フランス・ファシズムの研究 - 1930年代フランス保守派政治地図再構成 -
	小久保康之 国際関係学部教授	冷戦後のEU拡大「効果」に関する研究
	末松俊明 経営情報学部助教授	協力ゲーム理論に基づく環境対策費用の分担方式に関する研究
	小出義夫 経営情報学部教授	ニュートリノ放射質量起源説とクォーク・レプトン統一模型
	佐藤雅之 薬学部教授	機能性アンサ型化合物の合成研究
	豊岡利正 薬学部教授	毛根を利用した医薬品等生体機能性分子の分離解析
	三輪匡男 薬学部教授	血小板PAF受容体と連携したグアニルシクラーゼが関わる新規シグナル伝達系の解明
	合田敏尚 食品栄養科学部助教授	栄養素・機能性食品成分に対する消化管応答の分子基盤に関する研究
	大橋典男 環境科学研究所助教授	新興感染症「エーリア症」病原体の宿主応答におけるプロテオーム解析
	山田静雄 薬学部助教授	過活動膀胱における神経伝達物質受容体特性の解析と創薬

<b>特定領域研究(2)</b>	武田厚司 薬学部助教授	生体必須微量元素の動態を利用した新規脳腫瘍画像診断薬剤の開発
------------------	-------------	--------------------------------

<b>萌芽研究</b>	中島登美子 看護学部教授	乳幼児の夜泣きに対する家族支援プログラムの開発
-------------	--------------	-------------------------

<b>若手研究(B)</b>	太田敏郎 大学院生活健康科学研究科助手	腫瘍血管新生阻害食品成分の探索
	内藤博敬 環境科学研究所助手	水産養殖環境における水中および土壌中のウイルス遺伝子量モニタリング法確立
	杉山千歳 環境科学研究所助手	水道水中の強力な変異原物質MXの変異誘発機構に関する研究
	古田 巧 薬学部助手	gem-ハロゲン化合物の新規合成法の開発と利用
	加藤 大 薬学部講師	生体分子を集積化した高性能解析系の開発
	佐藤子 看護学部助手	大学看護学教育における情報リテラシー教育方法の開発と評価
	齊本美津子 看護学部助手	10代の母親の母子関係に関する研究
	熊坂隆行 看護学部助手	長期入院患者のQuality Of Lifeの向上を目的とした動物介在看護

<b>研究採択者(継続分)</b>	基盤研究(A01) 小久保康之(国際関係学部教授)
	基盤研究(B02) 鈴木康夫(薬学部教授) 増澤俊幸(薬学部助教授) 木村忠直(看護学部教授)
	基盤研究(C02) 伊勢村 護(食品栄養科学部教授) 森本俊明(薬学部助教授) 山口正義(大学院生活健康科学研究科教授)
	武田厚司(薬学部助教授) 貝沼やす子(食品栄養科学部教授) 水野かほる(国際関係学部教授)
	森山 優(国際関係学部講師) 吉村紀子(国際関係学部教授) 渡部和雄(経営情報学部教授)
	森田克徳(経営情報学部講師) 小林みどり(経営情報学部教授) 岩堀恵祐(環境科学研究所教授)
	鈴木 隆(薬学部助教授) 吹野洋子(食品栄養科学部助教授) 藤井 敏(薬学部教授) 菅谷純子(薬学部助教授)
	根本清光(薬学部助手) 田邊由幸(薬学部助手) 小林公子(食品栄養科学部助教授) 福島 健(薬学部助教授)
	下位香代子(環境科学研究所助教授) 阿部郁朗(薬学部講師) 松田正巳(看護学部教授)
<b>萌芽研究</b>	小林裕和(大学院生活健康科学研究科教授) 出川雅邦(薬学部教授) 鈴木啓子(看護学部助教授)
<b>若手研究(B)</b>	湖中真哉(国際関係学部助手) 福永有夏(国際関係学部講師) 鈴木竜太(経営情報学部講師) 吉成浩一(薬学部講師)
	黄倉 崇(薬学部助手) 永田文子(看護学部助手) 大屋浩美(看護学部助手) 石村佳代子(看護学部助手)
	増田修一(食品栄養科学部助手) 大浦 健(環境科学研究所助手) 牧野正和(環境科学研究所助教授)
	伊吹裕子(環境科学研究所助手) 宮田直幸(環境科学研究所助手)

## 平成15年度開学記念行事を開催

平成15年度の開学記念行事が4月25日(金)に開催された。今年で12回目となった開学記念行事の第1部では、昨年度に引き続き「21世紀の県立大学」をメインテーマとし、「県立大学に期待するもの」についてパネルディスカッションが行われ、廣部学長、大野副学長、各学部長、及び長谷川剣祭実行委員会委員長、高藤クラブ・サークル連合委員会委員長、新入生歓迎委員会の小松さんの学生3名が参加した。園部学生部長がコーディネーターを務め、昨年度は学生の質問時間などが不足したことから、今年はず3名の学生から、ゼミ、履修科目の選択に関する事、夏期休業に関する事、クラブ活動の部室、部費に関する事などについて本学に期待することや要望が出され、これに対して関係学部長などが応答することによりディスカッションが進められた。



第2部の教職員と学生の交流会である「はばたきの集い」では、実行委員の教職員とAVL委員会、ラグビー部などの学生が協力して準備、進行を行い、約300名の教職員と学生が飲食を共にしながら語り合いお互いの交流を深め合った。オープニングセレモニーでは、司会進行を新入生歓迎委員会が務め、園部学生部長の開会のことばにより開会した。廣部学長のあいさつに続き「おとり会賞」の授与式が行われ、今年度は、関西薬学生連盟バレーボール大会で全勝優勝を果たしたバレーボール部及び地域での活動が評価されたジャズダンス部が受賞し廣部学長から表彰を受けた。交流会は大野副学長の乾杯の音頭で幕を開け、ジャズダンス部によるダンス、食品栄養科学部の教員と学生の有志による歌の披露があり交流会の場が盛り上がる中、教職員と学生が交流を深め合った。最後は園部学生部長が開会の言葉を述べられ締めくくった。



## 平成15年度『漢方と薬草の会』開催案内 - かゆみと漢方 -

【会場】午前 静岡県立大学 看護学部 4階 13411 講義室  
午後 静岡県立大学 薬草園  
【参加費】不要 (開催当日、直接会場へお越し下さい)

### 第1回 平成15年6月1日(日) - 診断・治療と薬物となる植物 - 決定!

午前(9:30~12:00)  
1. 漢方とは 大武 光((株)ツムラ)  
2. 健康食品中の薬用植物 上野明(静岡県立大学名誉教授)  
3. 生薬と漢方 野口博司(静岡県立大学教授)  
午後(13:00~)  
4. 薬草園見学会

### 第2回 平成15年8月3日(日) - 疾患と漢方 -

午前(9:30~12:00)  
1. かゆみに使う生薬 大武 光((株)ツムラ)  
2. アトピー-皮膚炎は漢方で治そう 二宮文乃(アオキクリニック院長)  
3. 薬草園見学について 宮本秀人(静岡県立大学薬学部共同研究員)  
午後(13:00~)  
4. 薬草園見学会

### 第3回 平成15年10月19日(日) - 疾患と漢方 -

午前(9:30~12:00)  
1. かゆみの原因 - 漢方の考え方 - 大武 光((株)ツムラ)  
2. かゆみを伴ういろいろな皮膚病は漢方で 二宮文乃(アオキクリニック院長)  
3. 薬草園見学について 宮本秀人(静岡県立大学薬学部共同研究員)  
午後(13:00~)  
4. 薬草園見学会

【お問い合わせ先】静岡県立大学薬学部 漢方薬研究施設・生薬学講座  
TEL(054)264-5664・5662

【共催】静岡県立大学薬草園・静岡県立大学生薬学講座・(株)ツムラ静岡営業所

## 教員の人事

### 就任(4月1日付け)

木苗 直秀 食品栄養科学部長  
木村 正人 看護学部長  
相馬 光之 生活健康科学研究科長  
佐藤 登美 看護学研究科長  
園部 尚 (薬学部教授) 学生部長  
伊勢村 護 (食品栄養科学部教授) 図書館長

### 採用(4月1日付け)

大野 忠 副学長  
福島 健 薬学部助教授  
脇本 敏幸 薬学部助手  
江木 正浩 薬学部助手  
小林 公子 食品栄養科学部助教授  
澤崎 宏一 国際関係学部講師  
剣持 久木 国際関係学部助教授  
小寺 栄子 看護学部教授  
中島登美子 看護学部教授  
西村 ユミ 看護学部助教授  
唐木晋一郎 環境科学研究所助手  
澤田 夏美 生活健康科学研究科助手

### 昇任(4月1日付け)

小林 裕和 生活健康科学研究科教授  
西山 克典 国際関係学部教授  
八木 公生 国際関係学部教授  
余 項科 国際関係学部助教授  
鈴木 啓子 看護学部助教授  
西田 公昭 看護学部助教授  
牧野 正和 環境科学研究所助教授  
(6月1日付け)  
伊藤 正樹 薬学部助教授  
石村佳代子 看護学部講師

## はばたき寄金からのお知らせ

### <平成14年度はばたき寄金事業実績・収支結果報告>

#### 事業実績

奨学金の授与

フィリピン大学及びモスクワ国立国際関係大学短期交換留学生（派遣学生3人、受入学生2人）に奨学金を授与した。

文芸コンクール・スピーチコンテストの実施

第6回文芸コンクール（7月～10月）及び第5回学生スピーチコンテスト（11月2日）を実施した。

創造力啓発コンテスト（学長企画イベント）の実施

発明や省エネルギーなどのアイデアの提案を募集し、7件の提案があり、うち2件に特別アイデア賞を授与した。

はばたき賞の授与

海外で開催された学会で優れた研究発表を行った大学院生、成績優良卒業生8人など

\*事業内容の詳細は、本学ホームページの「はばたき寄金」の欄をご覧ください。

#### 収支結果

収入	5,280,435円
内訳	前年度繰越金 3,760,156円
	寄附金等 1,520,279円(38件)
支出	1,139,078円
内訳	報奨等 1,104,000円
	雑費(賞状筆耕代等) 35,078円
差引残高	4,141,357円(平成15年度へ繰り越し)

#### <はばたき賞>(剣祭での表彰後の受賞者)

ハンディーを乗り越え学業の努力が顕著であった看護学部4年長倉ゆきのさん、国際学会で選抜され口頭発表を行った、薬学研究科博士3年竹内良人君と、同じく薬学研究科修士2年徳富浩二君、留学生で言葉等のハンディーを乗り越え学業に優れた食品栄養科学部4年龔朝さんらにはばたき賞が授与されました。

#### <おおとり会賞>

おおとり会(静岡女子短期大学、静岡女子大学同窓会)からいただいた寄金により創設された、クラブ・サークル団体等で年間を通じ、顕著な成績を収めた団体、或は顕著な活動を行った団体に贈られる「おおとり会賞」の第2回の授与式が4月25日に開催した開学記念行事「はばたきの集い」において行われました。

受賞したのは、関西薬学生連盟バレーボール大会で全勝優勝したバレーボール部と、大学内外でのダンス活動が認められたジャズダンス部の2団体でした。



## 恩師との出会いを顧みて

産学官連携推進コーディネーター 小國 伊太郎

自分の来し方を振りかえってみると、われながら不思議に思うことがある。高校時代に化学が好きであったというだけで、工学部の応用化学科を志した私が、ここ数年、ヒトの健康を探索するために日々を送ってきたことである。定年を迎える今日まで、まる47年、その間の紆余曲折を思う時、その時その時に会った恩師のお顔やお声が次々に浮かんでくる。大学時代の恩師、福井三郎先生は著名なビタミンの研究者であった。先生から生化学の面白さを学び、この分野に進みたいと思いはじめたように思う。先生の口癖は、「どこにいてもアイデアが勝負だよ。特に地方にいる者は。」だった。なんとなく忘れられぬ言葉である。大学院では生物化学を専攻した。本当の研究とはどんなものかを、瓜谷郁三先生からみっちり仕込まれた。大学院時代の1966年8月、長野県野沢温泉村で開催された「生化学若い研究者の会 夏の学校」で、東京大学教授の江上不二夫先生が、「わたくしの研究歴」という演題で講演された。先生は講演のはじめに「研究のこころ」と題してご自身の詩を披露された。若い研究者に研究に対する姿勢を説かれたもので、私はいたく感動した。次にその詩を紹介する。

人に見えない山を見つけたら ぼくは早く登りたい  
 そんな山があるかしら  
 人に見える山に登るなら ぼくはゆっくり登りたい  
 おもわぬ花や小石があるだろう  
 たのしみながら登りたい  
 重要な研究課題があるのではなくて  
 われわれ自身の研究によって重要なものにするのである  
 もし重要な研究課題があるのならそれは誰かが重要にしたのである  
 (中略)

自分が発見した現象 物質などがあるならばまず何よりもそれを愛して育てよう

(蛋白質・核酸・酵素12(No.2),181(1967)より引用)



さらに、ご講演で先生の研究歴をお伺いしながら、研究者の持つべき心がまえを垣間見た思いであった。

また、修士論文の指導教官の一人が芦田淳先生であった。先生のご講義は大変ユニークで、先生の栄養科学特論は大変楽しみな科目であった。一コマの講義でひとつの総説を読み終えるような充実感があった。この頃、私のヒトの栄養と健康に対する関心が確実に培われたと感じている。「研究者にインスタントラーメンは必需品」というのが、先生の持論であった。後に、学長職(名古屋大学)に就かれたが、毎日研究室に顔を出され、夜遅くなると院生と一緒にインスタントラーメンに舌鼓を打たれた。「研究を食事のために中断することがないように」ということか「腹がへっては戦も出来ぬ」ということなのか、聞かずじまいであった。鬼籍に入られた今となっては聞くことも出来ない。

1975年、静岡県に奉職して緑茶に出会った。本当にふとした思い付きから、緑茶の保健効果を研究することになり、がん予防作用があるのではないかとわかったとき、心が躍った。結果を「愛して育てよう」と思った。多くの研究者によって、緑茶の保健効果は次第に明らかにされてきたが、今も私にとって重要な研究課題であり興味は尽きない。

大学に入学して以来、多くの方々に出会い、刺激を受け、感動し、喜び、苦しみ、その中から自分の進むべき道を示唆され、定年を迎える。すばらしい出会いのあったことに感謝し、出会いの大切さをしみじみと思っている。

## 受賞

### 浄化槽研究で受賞

岩堀恵祐、横田勇、宮田直幸（環境科学研究所）他2名

研究論文「ファジィ機能診断を活用した合併処理浄化槽での新たな維持管理方式の試み」

平成14年10月10日にグランシップ（静岡市）で開催された第16回全国浄化槽技術研究集会（主催：（財）日本環境整備教育センター、後援：環境省、農林水産省、総務省、静岡県など）の研究論文から、平成14年度浄化槽等の調査研究に係わる研究奨励制度に基づいた選考により、上記の論文が最優秀課題に選ばれた。

### 薬学部医薬生命化学教室の研究成果が国際学術雑誌の表紙に

生体微量金属の一つである亜鉛は細胞増殖に不可欠であり、亜鉛摂取不足により、成長遅延が惹起される。亜鉛は神経活動にも必要であり、脳内に取り込まれるが、その代謝回転はきわめて遅い。一方、脳内に腫瘍ができた場合には、その増殖のために亜鉛はすみやかに腫瘍部位に取り込まれる。正常な脳組織と腫瘍部位における亜鉛取込の違いを利用し、これまで放射性亜鉛により脳腫瘍を鮮明に画像化することに成功した。今回、脳腫瘍部位における亜鉛の高い集積性がその増殖と密接に関係していることを示した。

本研究成果は脳神経科学の国際学術雑誌であるBrain Research 3月7日号に掲載された。腫瘍増殖と関連した放射性亜鉛の集積性がバイオイメージングアナライザーにより見事に画像化され、この画像が表紙を飾った。タイトル：Alteration of zinc concentrations in the brain implanted with C6 glioma 著者：Atsushi Takeda, Haruna Tamano, Naoto Oku

### 日本薬学会第123年会講演ハイライトに採択

大学院薬学研究科修士課程1年、青木千恵さんの発表演題が、日本薬学会第123年会（長崎）の講演ハイライトに選ばれました。このハイライトは3, 383演題の中から審査により、優秀且つ一般の人々にもわかりやすい発表演題を選び、冊子として全国に配られることになっています。今回の青木さんの演題は、要旨を掲載して全国配布される最も優秀な38演題の中に選ばれました。青木さんの演題は「 Dengue熱の制圧をめざして：抗 Dengueウイルス剤の開発にむけて」というもので、本学でただ一つ選ばれた名誉あるものです。

## 研究助成の採択

財団法人アサヒビール学術振興財団 第18回研究助成金

研究題目「植物ポリフェノールと脂質二重層との相互作用」

食品栄養科学部 助手 熊澤茂則

財団法人日本科学協会 平成15年度笹川科学研究助成金

研究題目「脳腫瘍病態評価における放射性亜鉛の有用性に関する研究」

薬学部医薬生命化学教室客員共同研究員 玉野春南

## 研究室・ゼミ紹介

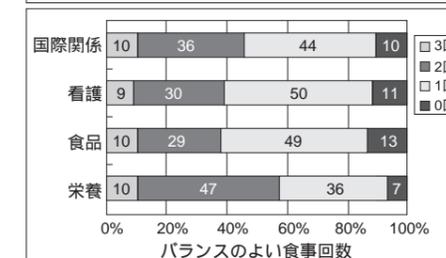
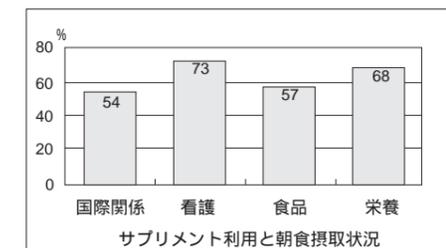
### 若い時こそサプリメントに頼らない食生活を!

食品栄養科学部助教授 大石 邦枝

以前は薬局でしか扱えなかった栄養剤やビタミン剤などのカプセルや錠剤が、コンビニやスーパーで食品として売られるようになりました。身近になったいわゆるサプリメントの利用状況について女子学生を対象にアンケート調査を行いました。調査に協力してくれた学生は406名で、その内訳は国際関係28%、看護28%、食品21%、栄養24%でした。よく利用されていたものはビタミンC、ビタミンB群、マルチビタミン、鉄、カルシウムで、一ヶ月にかかる費用は千円未満60%、3千円未満30%でした。利用の目的は肌荒れ、白い肌、便秘、疲れ（身体、目、肩こり）などが多くあげられました。サプリメントの効果については、あるとした学生は36%でした。食事との関係では、利用者のほうが食事の欠食率が高く、また主食・主菜・副菜のそろったバランスのよい食事の回数も少ない傾向にありました。情報源として若い女性向雑誌が多く、体調不良だけでなく美容目的の紹介もあり、「使わなければ」という気にさせられてしまうようです。

サプリメントの利用により大量の栄養素を摂取することも心配ですがそれ以上に食事をおろそかにしても良いと思うようになってしまうことが恐

れられます。健康を維持増進するためにはバランスのとれた食事が基本であることを、母親になる可能性のある若い女子学生に充分理解して欲しいと思います。100%野菜ジュースより、野菜をまるごと食べましょう。



### 外国籍ゼミ前線異常あり

経営情報学部助教授 ユン テーヨン

ユンゼミは、実に多様な学生で構成されている。年齢的には、19才の学部生もいれば、60代の社会人大学院生もいる。国籍も日本・中国・台湾・韓国とばらばらである。同じ中国人といっても、朝鮮族の出身もいれば、内モンゴルからの人もいる。若い留学生の中には、既婚者もいたりして、とにかく似たようなバックグラウンドを持つ学生がほとんどいない。何しろ、このゼミの教員がそもそも変わっている(?)のだから、集まってくるゼミ生がこうも多様性に満ちた構成となるのは、ある意味では自然な流れかもしれない。

多様なバックグラウンドを持つ人同士が対等な立場で議論すると、創造的で、じつにユニークな意見が出たりして、毎回のゼミがとても刺激的で、面白い。経営の国際比較の議論ともなると、異国籍のゼミ生間に「激戦」が展開されることが多く、まず定刻の時間にゼミが終了することはない。とくに、長年ビジネス世界での実務経験を持った社会人大学院生の存在は貴重である。ユンゼミで

は企業の行動や企業組織における人々の行動のあり方について研究しているわけだが、「現場」の臨場感が溢れる社会人大学院生の発言には迫力があり、たとえば日本企業の経営システムに関する研究テーマを持った留学生にとってはきわめて貴重な情報源となっている。

やはりあの社会人大学院生は、卒業させないようにしたほうが良さそうな気がしてくる。彼がとっているあの授業の単位を落とすしかないか。



# フィリピン大学留学体験記

国際関係学部4年(平成14年度) 酒井 美穂

私は2002年度の交換留学生として、フィリピン大学に半年間留学をしていた。10月から3月という短い期間であったが、そこで経験したことについて述べていきたい。

私がフィリピンを訪れたのは、日本が冬を迎えようとしている時期であったが、フィリピンでは雨期も終わり最高気温30度を超える晴天が続いている頃だった。飛行機が遅れたり、寮では予約していた私の部屋がなかったりと、多少のアクシデントにみまわれながらフィリピンでの生活がスタートしたのを今でも鮮明に覚えている。

授業はどれをとってもよいということだったので、「都市人類学」「社会福祉」「フィリピン語」の授業を履修した。基本的には英語であったが、話が盛り上がってきたり、冗談を言うときなど、先生はフィリピン語を交えて話をされていた。やはり、生徒も先生もフィリピン語での会話の方が、よりよい意思疎通ができるらしく、授業以外でもフィリピンの人々の自国語への愛着をしばしば感じる機会があった。

授業も興味のあるものばかりだったので、とても面白かった。特に社会福祉の授業に関しては、現在社会福祉士を目指している私にとって大変有益な授業であった。福祉がどのように欧米で発達してきたのか、それがどのようにしてフィリピンに入ってきたのかなど、時にはプレゼンテーションを行う形で勉強をしていくことが出来た。

フィリピン大学の授業以外にも、日本人同士で集まって「地域開発」についての読書会を行ったり、パヤタスというマニラのごみ集積所で生計をたてている人々が住んでいる地域のフリースクールを見学したり、実際にDSWD(社会福祉開発省)に行き、ストリートチルドレン対策の政策についての話を聞くこともできた。中でも印象に残っているのは、実際にフィリピン大学がサポートをしながら地域開発が行われている漁村へ、研修に行くことができたことであった。フィリピン大学の院で地域開発を専攻している先輩に連れてってもらい、現地の人と話をし、住民参加型地域開発についての講義をもらうこともできた。

フィリピンでは日本に比べて貧富の差を感じることも多く、「貧困」「福祉」「地域開発」などをキーワードに様々なフィリピンの状況を垣間見ることができたことは、私にとってとてもよい経験と



なった。

休みの時期には、友人と旅行へ行くこともあった。各地のおいしい食べ物を食べたり、観光地を見学したりしながら楽しい時間を過ごすことが出来た。時には、スペインの植民地当時の建物を見学することもでき、フィリピンのたどってきた歴史を感じ取ることもあった。また、バナウエという棚田で有名な地域は、首都のマニラとは気候が全く異なり、とても寒く、長袖を着ていないと風邪をひいてしまいそうであった。フィリピンはどこに行っても全てTシャツで過ごせると先入観をもって私にとって、このような気候や生活習慣などの違いがあることを知ることは、とても新鮮で興味深いものであった。

普段は大学内の寮で生活をしてきた。インターナショナルセンターというだけあって、世界各国の留学生が集まって生活をしてきた。日本人留学生が多かったのはメリットでも、デメリットでもあったと思うが、他国の学生と時間を過ごし、そこでさまざまな話をすることもできた。特に私のルームメイトはアメリカの大学からの留学生でアメリカ生まれ・育ちだったが、両親がフィリピン人ということだった。フィリピンにいる親戚との関係等、彼女をめぐる環境についての話を夜明けまで話すなど、フィリピン人の海外への移住、移民化についても考えることは多かった。

このように、いろいろ書いてくると、勉強ばかりしているように思われそうだが、実際には友人と映画を見たり、散歩をしたり、マンガやパバ



イヤを食べながら雑談をしている時間がとても貴重なものであり、楽しかった。これらの経験を無駄にしないよう、現在は、福祉の学校に通いながら、国籍やオーバーステイの関係で普通の小中学校に通うことのできない日フィリピン人の子どもたちのためのフリースクールでボランティアをはじめようとしているところである。

フィリピンで出会った多くの友人や先生方に支えられながらフィリピンの留学生活を送れたことに感謝をしている。また、この貴重な留学の機会を与えてくださり、大変お世話になった廣部学長、玉置先生、事務の法月さん、中島さん、はだたき基金の皆様、その他多くの先生方、友人にこの場を借りて幾重にも感謝申し上げたい。

## 健康をつくる食事のポイントアドバイス② 美容と健康のために野菜を食べよう

食品栄養科学部 助教授 白木まさ子

あなたは、毎日、野菜をどのくらい食べていますか。肉や卵を調理するのは簡単だけど、野菜を自分で調理するのは、ちょっとめんどくだし・・・そういえば、この頃食べていないなあ・・・と言っている人はいませんか。

栄養バランスがとれた食事には野菜がキーワード。野菜はビタミン、ミネラルおよび食物繊維を豊富に含んでいます。これらの栄養素は美肌づくりや体の調子を整えるのに役立つだけでなく、最近では、酸化防止効果や血栓予防効果、抗ガン作用などの有効性が注目されています。

では、1日にどのくらいの野菜をとったらいいのでしょうか。国民健康づくり運動「健康日本21」では目標摂取量を1日350g以上とし、このうち、1/3をほうれん草、かぼちゃ、ピーマンなどの緑黄色野菜でとることをすすめています。どんな野菜をどのくらいとればいいのかの目安量を

絵で示しました。350g以上というかなりのボリュームと思うかもしれませんが、料理方法を工夫すれば、野菜をたっぷりとることもそれほどめんどくではありません。カレーや野菜炒め、青菜のお浸しや実のたくさん入った汁物、ちょっと時間に余裕があるときはシチュー、ポトフ、寄せ鍋などがおすすめ料理です。



淡色野菜 230  
緑黄色野菜 120